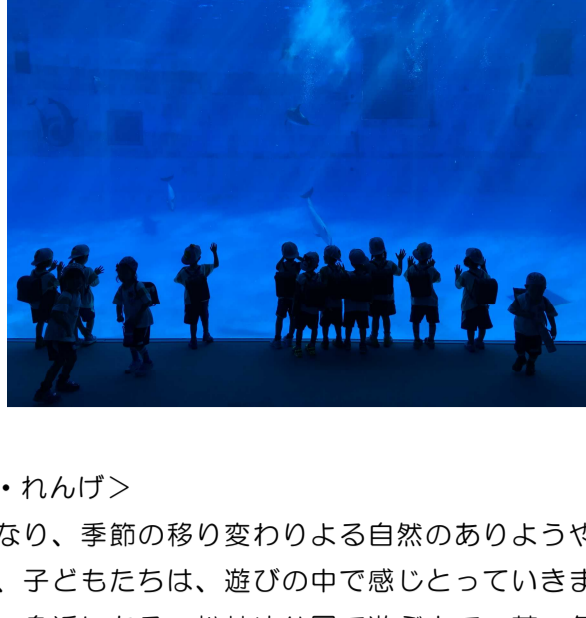


★2学期Ⅱ期・10月中旬～11月中旬教育課程(指導計画)★



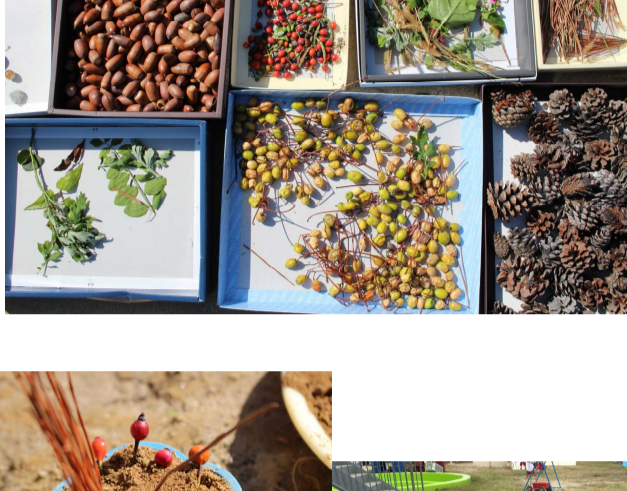
<年少・れんげ>

秋になり、季節の移り変わりによる自然のありようや、生活の変化を、子どもたちは、遊びの中で感じとっていきます。子どもたちの身近にある、松林や公園で遊ぶ中で、葉の色や落ちていた木の実を、見つけ拾い集める姿がでてきます。そして、集めた物を、色・形・大きさなど、集合や数を意識して遊ぶようになります。

収集した、色とりどりの木の葉・木の実は、いろいろな物に見立てて遊んだり、作ったりする姿になり、保育者は、その姿を共感的に受け止めます。子どもたちが、これまで遊んできた遊びに活用することで、さらに、遊びが深まっていきます。「人工物」ではない「自然物」だからこそ、子どもの発想を引き出すことができるのです。

遠足の活動では、お菓子を自分で買う体験や、遠足に行く為に何を準備するのか等、遠足の見通しをもつとはどういうことなのかに触れていくこととなります。本物のお金を使うことによって、お金の価値に触れ、実際にお金を使ってやりとりする中で、一対一対応や自分で買いたいお菓子を選ぶなどの体験にも繋がっていきます。

そして、物語性のある遊びを通して、目的をもって行動するという体験を重ねてきた子どもたちは、年長の「水族館に行く」という状況の中で、『自分たちも行きたい。』という思いが出てきます。ペンギンのペンちゃんに会う、という目的を持ち、ペンギンの生態を絵本などで知ることで、海の生き物に関心を持つ体験をしていきます。



<年中・たんぼぼ>

運動会が終わり10月中旬からは素材あそびを主に行います。秋の花、木の実、落ち葉など自然物の素材で思い思いにあそぶことに加え、1学期から続けてきた『紙』を利用した指先の巧緻性から手首の動きを利用し、1つの素材を変化させていく体験を技法あそびという形で行います。

1つ目は『ジャバラ折り』線を意識し、山折り谷折りと同じリズムで折る。

2つ目は『バネ折り』細い画用紙を同じ方向、同じリズムで折る。

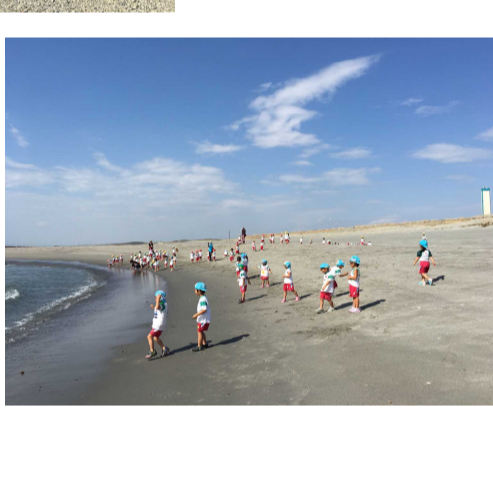
3つ目は『ペーパーキリリング』細い画用紙を鉛筆で同じ方向に巻いていく。

など同じ条件を繰り返すことで1つの物に仕上げていき、そこから自分の作りたいものおもちゃ作りへとあそびを発展させていきます。

『音あそび』では子ども達が音に興味関心を持てる様に音の面白さに共感しながら楽しんでいきます。同じ場所を違う物で叩いた時の音の変化や色々な物の音をよく聞きながら違いの発見をしていきます。そしてスチール缶+αで音の変化、音の違いに気づき音を出す、音を作る楽しさを体験していきます。

水族館の活動では、プタガメに会いに行くためには、どうすれば良いのかを考え、行動していきます。その中で、水族館に行きたい想いを自分なりの言葉で園長に伝えていきます。また、水族館に行くためのお金を出せるのか、遠足に持って行くお菓子を買いたい事を保護者に聞く体験を通して、自分がやりたいことを叶えるために自分にできることは自分でやっていきます。

そして水族館へ行き、プタガメに会えた喜びに共感しながら、生き物の動きやどんなことを思っているのかイメージして言葉にしていきます。これらの体験を通して、年長になるまでに活動の中で見通しを持ち、自分たちのこととして捉え、自分たちで考え、行動するという意識を持つ基盤を作っているのです。



<年長・すみれ>

運動会が終わり、目標や目的に向かう生活から、ひとりひとりの子どもが自分で取り組みたいことを見つけてあそびや生活を広げていく、ゆったりとした時期に入っていきます。また、自然の移り変わりを子どもたちなりに感じる時期でもあり、身近にある木の実・葉・虫などにも関心を持つようになるでしょう。環境のひとつとして置かれた絵本や日々の散歩などをきっかけに、自然物や生き物に関心を持ち、あそびにつなげていく姿も見られるはずで。

そんな中、行事である名古屋港水族館への遠足を生活の中に落とし込んでいくために、水族館から手紙が届くという状況をつくります。年長では、イルカに注目が向くように支えていく中で、イルカの特徴や生態を知ったり、イルカを実際にイルカショーを体験します。そして他の学年の保育者に「見たかった！」と声を掛けてもらうことで「自分達でイルカのショーやっあげよう！」と話し合い自分達でショーをつくり上げていきます。材料や道具など必要な物や、何を見せたいのかなどの見通しを持ちながら、活動を続けていく中で、保育者が見せ方や構成を子どもたちが検討できるように援助しながら、自分たちの感動を伝えていくことの体験を通してその喜びを感じていきます。

